

異世界

料理で王国の胃袋を掴みます!

日帰りごはん

2

Chikki

ちっき

illust. 薫る石

登場人物紹介



マルグリット

ジブラロール王国の
王妃。



エイダン

ジブラロール王国の
国王。



ユラ

孤児院に囚われていた
白金狐族の女の子。



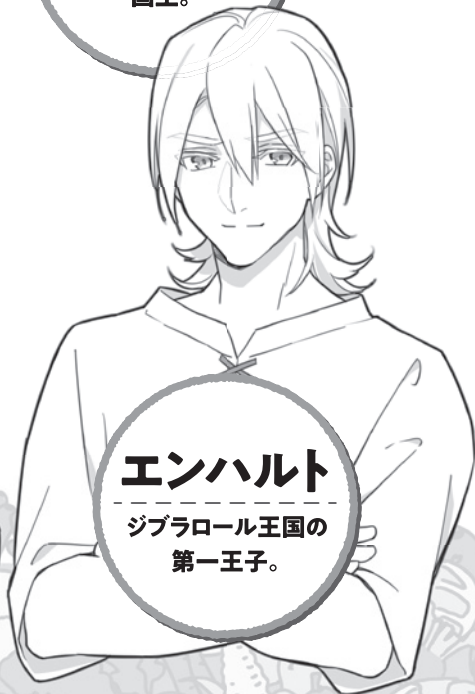
ふじ い ちはる
藤井千春

本編の主人公。
17歳、高校生。父子家庭で、
父親が海外にいるため、
現在一人暮らし中。



ふじ い たい き
藤井大樹

千春の父親。



エンハルト

ジブラロール王国の
第一王子。



モリアン

千春の侍女。
ちょっとおバカさん。



サフィーナ

千春の侍女。
有能でおしとやか。

第1話 ハンバーガー！

ある日突然、十七歳の藤井千春の自宅のクローゼットと異世界の王宮が繋がってしまった。今のところ千春限定ながら、行き来も持ち込みも自由自在。これをきっかけに、千春と異世界の人々との交流が始まる。

王妃に気に入られ、国王夫妻の養女となった千春は、街を散策する中で孤児院で虐待を受けていた白金狐の獣人で六歳の女の子ユラを助け、王宮の千春の部屋まで連れていった。そこで一夜を過ごしてから、虐待によって目が見えなくなっていたユラを、千春は魔法によって治療する。

そして、元気になったユラがお腹を空かしているということで、千春のお付きの侍女、サフィーナとモリアンとともに、ユラのリクエストであるお肉を食べようと、王宮の厨房へと向かった――

「ルノアーさん来たよー」

食堂と繋がっている厨房に入るなり、千春は料理長のルノアーに挨拶をした。

「おう！ いらっしやい、その子は？」

「ユラちゃんって言います。ちょっと預かってるんですよ」

「ほう。で？ 食堂で朝飯を食っていくのか？」

「今日は厨房を借りていいですか？　なんか作ろうかと思って」
「その左側を使っていいぞ。今日は何作るんだい？」
「ハンバーガーでも作ろうかと思えます」
「ハンバーガー？　この前作ったハンバーグみたいなものか？」
「こそ、ハンバーグを薄く作って、パンに挟むんです」
千春は野菜庫に足を運ぶ。
「トマトとレタスっぽいこれと……ルノアーさん、ピクルス的なものないですか？」
「ピクルスってなんだ？」
「野菜の酢漬け」
「ないな」
「そかー、保存食的なものだしなー」
「もしよかったら、作り方を教えてください」
「うん、シャリーちゃんにでも教えておきます」
シャリーは料理人の一人で、これまでも千春が料理を作るときに色々手伝ってもらっていた。
千春は野菜を持ち出し、テーブルに置いた。
「どうせみんなも食べたがるだろうから手伝うぞ」
ルノアーが、すぐに部下の料理人を数人連れて、千春のそばに来た。
「チハルさん、ハンバーグの薄いやつってことは、挽肉がいるんだよね？」

「そう。とりあえず、四人分作ろうかと思ってたんですけど……」
ルノアーがにやりと笑って、目の前に肉の塊をいくつか置いた。
「いや、それはさすがに多すぎでしょ！」
「余ればハンバーグにすればいい。肉は牛とオークか？　あと、王族にも出すのか？」
「王族が食べる料理じゃないんですよ。手づかみで食べるし」
「それじゃ、牛とオークの合挽か」
「いんやー牛肉百パーセントでしょ！　ハンバーガーなら！」
「そうなのか？　わかった、それじゃあ牛肉を挽肉にするぞー」
「おー！」
掛け声とともに、料理人たちはいっせいに肉を包丁で叩きます。
「こりゃーすぐできそうだね。では、こっちはなんちゃってウスターソースを作りまーす」
「前にウスターソースは、作れないって話じゃなかった？」
モリアンが、千春の「ソース」という単語に反応する。
「うん、だからナンチャッテウスターソースです」
「チハルさんのソースはどれも美味しい！」
千春は、モリアンからユラに視線を移した。
「ユラちゃんは包丁使ったことある？」
「ないです」

「そか、それじゃあ、レタスをちぎってくれるかな？」
「はい」

ユラが何かしたそうだなと思った千春は、簡単な仕事を振ることにしたのだ。

「サファイー、ちよつとケチャップ貰^{もら}ってきてもらえる？」

「はい、シャリーがわかるかしら？」

「そだね、モリアン、醤油^{しょうゆ}と胡椒^{こしょう}を取ってきてもらえる？」

「はい」

サファイーナとモリアンは材料を取りに行った。

「さて、あとはトマトをスライスしてパンか。ルノアーさん、パンください」

「ああ、ちよつと待^{まち}っていてくれ」

その間に千春は、トマトを一センチほどにスライスして、器に並べていく。

そこへ、モリアンが戻ってきた。

「チハルさん、醤油^{しょうゆ}と胡椒^{こしょう}を持ってきました……あ、私はトマト抜きでお願いします」

「えー、トマトの酸味が美味^{おい}しいのに」

「だってえ……」

「マヨネーズつけて食べなさい」

「マヨが入るなら……」

マヨネーズがあればトマトも食べられるモリアンは、しげしげ^{うなず}頷^{うなず}く。

「はい、ケチャップ持^もってきましたよ」

サファイーナもケチャップを持^もってきた。千春はそれらを使い、ナンチャッテウスターソースを作^{つく}りはじめる。

「それじゃ、ケチャップに醤油^{しょうゆ}を少々……あと胡椒^{こしょう}を少々……」

「それがウスターソース？」

「厳密には違うけど、似たような味になるよ、モリアン」

そう言^いって千春は、二人に一口舐^なめさせる。

「ケチャップだけどケチャップじゃない！」

「美味^{おい}しいですね」

モリアンとサファイーナは喜^{よろこ}んだ。そこへ、ルノアーがパンを運^運んでくる。

「チハルさん、パン持^もってきたぞ」

「おー、ちょうどいいサイズの丸いパンですね」

「一番食べやすい形だからな。多めに作^{つく}ってるんだ」

その後も千春がルノアーとパンの話^話をしていると、挽肉^{ひき肉}作製^{つく}チームから声^{こゑ}がかかった。

「チハルさん！ 挽肉^{ひき肉}できたぞー！」

「はいはい。それじゃあ、挽肉^{ひき肉}を薄^{うす}いハンバーグにして、パンのサイズに成形^{せいせい}してください。それから、塩^{しお}と胡椒^{こしょう}をパラパラかけて、とりあえず四枚焼^{やく}いてくれる？」

「了解！」

料理人たちがフライパンで成形した肉を焼きはじめる。
「それじゃ、パンを横に切ります」

千春は半分に切ったパンズにレタスを載せる。すると、肉を焼いていた料理人が彼女に尋ねた。
「チハルさん、焼き具合はこんな感じか？」

「うん、その焼けたのをパンに載せてね」

レタスの載った四つのパンにパテも載せていく。

「それから、このウスターモドキをちよろつとかけてー。モリアンの分にはマヨを少々。上からトマトを載せー、パンを載せる」

「可愛いわね」

「おいしそうです」

「早く食べたいですー！」

サフィーナ、ユラ、モリアンはそれぞれ感想を言いながらも、目はハンバーガーに釘づけだった。

「さあ、食堂のテーブルに行つて食べましょー」

「はーい」

朝食を食べに来た兵士たちが、千春たちの持っている料理を見て、同じものをルノアーに注文していく。不可能かと思いきや、ルノアーの指示により既に大量に調理されており、他の人もすぐに食べられそうだった。

「はい。それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

「いただきます？」

千春がよく食べる前に手を合わせて言うため、サフィーナとモリアンも一緒に食べるときは言うようになった。ユラは三人がやっているのを見て、なんとなく真似をしたのだ。

「うん、美味しいね」

「これは美味しいわね、チハル」

「おいしー！ー！ー！ー！」

「モリアンうるさい」

ユラは何も言わず黙々と食べていたが、かなり気に入ったようだ。

「これは毎日でも食べたくくなりますよー！」

「食べられるんじゃない？」

千春は周りを見ながら、モリアンに答える。

「うめえー」「新しい料理か！」「料理長！ あと二つくれ！」「俺もお代わりだ！」——などと、ハンバーガーを食べた兵士たちが絶賛している。

「毎朝定番になりそうな勢いですけど、早く来ないとなくなりそうですね」

サフィーナは兵士たちの食べっぷりを見て呟いた。

「兵士の人たちはよく食べますもんねー」

「これにフライドポテト付けたら最強だしね」



「フライドポテト！ 最近ケチャップとマヨネーズ混ぜて食べてます！」
「『フライドポテトくれ！！』」

モリアンと千春の話を聞いた兵士たちが、一齐に厨房へ注文する。

「チハルさん！ 変なこと教えないでくれ！ 手が足りなくなる！」

ルノアールは千春にクレームが入れつつも、すぐにポテトを揚げはじめた。

「ユラちゃん、気に入った？」

小さな口をいっぱい開けてハンバーガーを食べるユラは、モグモグしながら千春に対して首を縦に振る。

「んー……可愛いー可愛いー！」

千春はニヤケながら声を上げてしまう。

「ほんとに、可愛いですね」

「サフィー、昨日の夜は大丈夫だった？」

「チハルが言う通り、夜一度泣きながら起きましたが、私が横に一緒にいたので、すぐにまた寝つきましたよ」

「そうだねー。あんな目に遭って、しかも目が見えないし。サフィーがいてくれてよかったよ」

「そんなことはないですよ。こんな可愛い子と添い寝なんて役得でしたから」

「私も添い寝したかったー！」

「モリアンは寝相悪いでしょうに、一緒に寝させるわけじゃないでしょう。それに、起きたのを気づか

ずに朝まで寝てるでしょうし」

サフィーナはモリアンの寝姿を知っているため、昨日はユラと一緒に寝させなかったらしい。そして千春、サフィーナ、モリアンが食べ終わった。すると、ユラも急いで食べ終えようとする。「ユラちゃん、ゆっくり食べていいからね」

そんなユラに千春は優しく声をかける。ユラはコクコクと頭を縦に振り、また自分のペースに戻ってハンバーガーにかじりつく。

「チハル、今日の予定はどうするの？」

サフィーナがそういえば聞いてなかったと、千春に問う。

「んー、本当なら帰って試験勉強するつもりなんだけど、どうしようかなー」

「チハルさん、それじゃあ、こっちで試験勉強したらいいんじゃないですか？」

「それだ！ モリアン、冴えてる！」

「それでは、今日はチハルの試験勉強を邪魔しないように、モリアンは隣の部屋で待機ですね」

「な……なんでですか、サフィーナさん!？」

「うるさくするでしょう？」

「……うるさくしないでです」

「まあ、うるさかったら押し込めますから。戻りましょうか」

「そだね、ユラちゃんも食べ終わったし、戻りましょうかね」

サフィーナに続いて千春も言い、席を立った。厨房は戦場のように忙しくなっていたが、四人は

気にしていない。

「チハルさん！ この料理はダメです！ 人気ありませんですよおおお！」

ルノアールは千春の後ろ姿に叫んだ。千春もサフィーナもモリアンも、ユラでさえ聞こえているのに、何も反応することなく、スタスタと食堂を去っていった。

第2話 妹！

「チハル！」

千春の自宅と繋がる門のある部屋に四人が戻る途中、第一王子のエンハルトに声をかけられた。

「ん？ あーハルト兄様？」

「なんで疑問形なんだ？」

「いや、呼び方はハルト兄様でいいのかなと思ってね？」

「好きなように呼べばいい」

「それで何？」

「ユラの目は治ったのか？」

「治ったよ、めっちゃMP減ったけどね」

「そうか、それはよかったな」

「それで？ 呼んだのはそれだけ？」

「いや、その子……ユラの今後の待遇について話そうと思って来たんだ。とりあえず、千春の部屋に行こう」

千春、エンハルト、侍女二人、そしてユラは門の部屋に向かう。部屋に着くとサファイーナはお茶の準備を、モリアンはユラと一緒に隣の寝室へ移動した。

「それで？」

落ちついたところで、千春はエンハルトに尋ねた。

「んー結論から言うと、チハルの好きないようにしていい」

「は？ どういうこと？ 意味わかんないんだけど。ちなみに、それを決定した人は？」

「父上と母上二人が、チハルに決定権を持たせた」

「んー……その心は!？」

「なんだそれは。まあ、言いたいことはわかるがな。普通なら孤児院に戻すか、ユラのいた氏族のもとへ帰すかになるんだが、狐の獣人は基本南の寒いところに住んでることが多い。この国の最南端の領土よりもさらに遠くなる。さらに、帰すとなると、かなり面倒なことにもなりかねん」

「面倒？」

「ああ。ユラの種族的に、かなりの確率で違法な奴隷狩りによって連れてこられたはずだ。獣人の奴隷狩りが合法の国もあるからな、変に帰すとまた奴隷にされるかもしれん」

「ダメじゃん!」

「この国では獣人は普通にいる。だから、孤児院に戻し、獣人に養子として引き取ってもらおう——これが一番安全だろう」

「そうだね。でも、そうじゃないんだよね」

「ああそうだ。父上も母上も、チハルに任せると言った」

「そうかあ、ユラちゃんの両親はいるのかな？」

「いや、最悪……だが聞くしかないだろうな、呼んでもらえるか？」

「うん」

千春は隣の部屋へ行き、モリアンとユラを連れてきた。

「ユラちゃん、聞きたいことがあるの」

千春はユラに尋ねた。

「……おとうさんとおかあさんは死んじゃったよ」

「聞こえてたの!？」

「うん、ユラ、となりのへやでもきこえるから」

「モリアンは聞こえてた？」

「いえ、ぜんぜん聞こえません」

モリアンの後に、エンハルトが口を開いた。

「獣人の耳のよさを忘れてた。すまん。ユラ、聞き直すが、両親はもういないんだな？」

「うん」

「親戚とか面倒を見てくれるような人は？」

ユラは首を左右に振った。

「そうか、辛いことを聞いて悪かったな」

「ううん、でんかも、ユラをたすけてくれたんです、わるくないです」

泣きそうな顔でエンハルトに笑顔を見せるユラ。それをじっと見つめていた千春が決然と言う。

「決めた、私が面倒見る」

「え？」

ユラはチハルを見る。

「まあ、そう言いますよね。私でもそう言いますもん」

「選択肢は最初から一つでしたわよね」

「そうだな。俺も聞く前からそう言うだろうとは思っていた」

モリアン、サフィーナ、エンハルトの三人は、わかってたよと言わんばかりにウンウンと頷く。

「ハルト兄様はユラちゃんの両親のことわかったの？」

「いや、だがおおよその見当はな。奴隷狩りは基本村を襲う。稀に一人でいる子連れ去ることもあるが、こんな小さな子供が一人で攫われるようなところなんぞ行かんだろ。ただ、可能性という点で確認したんだよ」

「そっか、うん、私が面倒見るよ」

「それは娘としてか？」

「そんなわけないでしょ！ 未婚の母か！」

「それじゃあ妹か？」

「妹かなあ」

「ふむ、ならば手続きしないとな」

「手続き？ なんの？」

「そりゃあチハルの妹だろう？ お前、今の自分の立場をわかってるのか？」

「……あ！」

「そういうことだ。お姫様が一人増えたな」

「待って、それはダメだよね！」

「いいんじゃないか？ 陛下と王妃が第一王女のお前に一任したんだ。お前がそう決めれば、あの二人もそのように動くと思うぞ」

サフィーナとモリアンは事が事だけに、我関せずというスタンスで立つたまま聞いている。ユラは千春とエンハルトを交互に見ているが、あまり意味がわかっていないようだ。微妙に沈黙が続いていたところで、ユラがドアを見る。

コンコンコンと、ドアがノックされた。

サフィーナがすっと動き、ドアを開ける。

「入ってもいいかしら？」

そこにいたのは、王妃マルグリットだった。

「お母様！」

「母上……来るなら言ってください」

千春とエンハルトが驚いて声を上げる。

「いいじゃない。で？ どうなったのかしら？ あらあらあらこの子ね！」

マルグリットはユラを見ると、近づいて腰を屈める。

「おはよう。名前はユラだったかしら？」

「はい、ユラです」

ユラは急に現れた女性にビククリしている様子だ。

「で？ チハルは面倒を見るんでしょう？ 娘にするの？ 養女？ 妹？」

「な？ 父上も母上も、こうなると思ってお前に任せてるんだ」

エンハルトは肩をすくめる。千春はマルグリットに自分の決断を話すことにした。

「……妹にしたいな」と

「フフッ、娘がまた一人増えたわあ。可愛いわね！」

そう言っ、マルグリットはユラを抱きしめる。

「母上、ユラが困ってますよ」

「お母様、まだユラちゃんから了解は貰ってません！」

エンハルトと千春がそれぞれツツコミを入れた。

「そうなの？ ユラちゃんはどうしたいのかしら？」

改めてマルグリットはユラに問いかける。

「えっと、チハルおねえちゃんにおんがえしをしたいと思います。でんかにもおんがえししたいと思います」

「そっか。その恩返ししたいチハルおねえちゃんは、ユラのことを妹にしたいんだって。どうする？」

「お母様、その言い方はずるくないですか？」

千春はマルグリットの聞き方に苦笑する。

「いもうとになってもいいの？」

「うん、ユラちゃん、私の妹になってくれるかな？」

千春はユラに言う。

「うん、おねがいます」

ユラは頷いた。

「決まりね！ それじゃあ、ちょーっと私も動いてくるわね」

「どうするんですか？」

動くと言われ、千春は思わずマルグリットに聞いた。

「チハルは私の遠戚ということで養女にしたじゃない？ そこで、チハルが義理の妹であるユラと一緒に連れてきたことにします。養女の家の養女となりますが、問題ないでしょう」

「問題アリじゃないですか!? 獣人とかそういうのは大丈夫なんですか？」

「問題ないわよ。獣人の子を養女にする貴族も普通にいるわ。少なくとも、この国では獣人の貴族もいますからね」

「そうなの？」

初耳な千春は、エンハルトを見る。

「ああいるぞ？ 特に武官貴族に多いな。第一騎士団の団長は虎の獣人だ」

「王族にいても大丈夫？」

「陛下と王妃がいつて言うならいいんだろ？」

エンハルトは笑いながら言う。

「それじゃ、私は行くわね。あ、チハルの寝室にベッドを一つ増やしておかないと。エリーナ、執事長のセバスに伝えておいてくれるかしら？」

「はい、了解しました」

一緒に来て、ドアのそばに待機していたマルグリットの筆頭侍女のエリーナはすぐに返事をする。そして、マルグリットと侍女たちは部屋を出ていった。

「さて、ユラの待遇も決まったことだし、俺も行く。ユラ、俺のことはお兄ちゃんでもいいぞ。あーお兄ちゃんが三人できるのか。俺はハルトお兄ちゃんだな」

「私と同じように、お兄様じゃないの？」

千春が突っ込む。

「チハルだけでなく、ライリーもフィンレーもお兄様呼びだからな。お兄ちゃんって言われてみたいじゃないか」

エンハルトは笑った。

「ハルトおにちゃん？」

「ああそうだ。よろしくな、ユラ」

エンハルトはユラの頭を軽く撫で、笑顔で部屋を出ていった。

「チハルおねえちゃん？」

「そうだよーお姉ちゃんだよー」

「よろしくおねがいます」

ぺこりと頭を下げるユラ。

「こちらこそよろしくね」

千春もユラに頭を下げた。

「それでは、チハル、勉強しましょうか？」

サフィーナはここに戻ってきた理由を、千春に言う。

「うえええ……思い出しましたああああ」

「ユラ様は貴族のマナーを少しずつ覚えていきましょうか」

「はい！ がんばります！」

「ユラ様？」

急にサフィーナが様付けするので、千春はビックリした。

「第二王女殿下になるわけですから、ユラ様でしょう？」

「私にはチハルなの？」

「他の貴族の方がいたらチハル様って言ってるじゃないですか」
「あー、そうだったね」

「普段はユラちゃんと言いますけど、ユラちゃんも『ユラ様』と呼ばれ慣れしておかないと、色々
と面倒なこともあるんです。勉強のときはユラ様と呼ばせてもらいます」

「はーい！」

「いいお返事です、ユラ様。それではチハル様のお勉強を邪魔してはいけませんから、そちらの部
屋でマナーのお勉強をしましょうか」

「待って！ ここで一人で試験勉強は寂しい！」

千春が必死で訴える。

だが、サフィーナは非情だった。

「……モリアンを置いていきますから」

「いらん！」

千春は即答する。

「ちよつと！ チハルさん！」

「いい！ 一人でやる！」

「チハルさん！？」

千春はモリアンに何も答えず、自宅から勉強道具を持ってきて、黙々と試験勉強に勤しんだ。
モリアンはポツンと立ったまま、千春の勉強している姿を見ていた。じーーーーっつと。

第3話 オークカツサンドバーガー！

「よし！ こんなもんかな？」

勉強の目的をつけた千春は、スマホで今の時刻を見る。もう少しでお昼だ。そしてモリアンを見
る……コックリコックリと、いつの間にか椅子に座って眠りこけている。

「モリー、そろそろお昼だよー」

「ふあああ」

「付き人がそんなんでいいの？」

「考えてみてくださいよ。途中お茶を淹れたとはいえ、四時間無言で立ってる人のことを」

「いや、座ってたよね、その椅子で」

「多分気のせいです」

「そっか。サフィーとユラちゃんを呼んできてくんない？」

モリアンが呼びに行く、すぐに二人はこちらの部屋へ戻ってきた。

「チハル、お疲れ様。お昼にされますか？」

「そうしよう、サフィー。ユラちゃんもお疲れ様」

「つかれてないよ？」

「おー偉いねえ。さて、お昼はどうしようか？」

「食堂には行くんですよね？」

「そだね、ユラちゃんは何か食べたいものはある？」

「はんばーがー！」

「私もハンバーガー食べたいですー！」

ユラとモリアンは、朝も食べたハンバーガーをご所望だった。

「いや、さすがにお昼は別のものを食べようよ、美味しかったけどさ」

「確かに美味しかったですね。あのパンの中身を変えたら、サンドイッチになるんですか？」

ハンバーガーの味を思い出しながら、サファイーナが千春に問う。

「まあ、パンに挟んだものがハンバーグだからハンバーガーだと思っただけ、詳しくは知らない」

「調べたりはしないんですか？」

「調べてまで知りたい情報？」

「……いえ、そこまでは」

「よし！ 食堂に行こうか！」

「はーいー」

黙って聞いていたユラとモリアンは、名前のことよりも食堂の方が大事だった。

「それで、お昼はハンバーガーじゃなくて何か作るんです？」

「そうだねえ、パンに挟んで食べるのが気に入ったなら、カツサンドでも作ろうか」

サファイーナと千春は、食堂に向かいながらメニューを相談する。

「カツサンドですか？」

「そ、前作ろうと思っただけけど、ウスターソースが作れそうにないから作らなかったの」

「ナンチャッテウスターソースが作れたから？」

「そういうことですにやー、ナンチャッテウスターを使ってカツサンド作りましょかね」

「にやー……たまに出ますね、にやー」

サファイーナは呆れたように真似をする。

「ユラちゃん、にやーって言ってみてください！」

モリアンがユラに振った。

「にやー？」

「可愛いなー！ でも、狐ならコンコンじゃないの？」

「え？ きつねはわんわんだよ？」

「うっそん？」

千春はユラに狐の鳴き声を訂正された。

「まじか……あとでネットで見てみよ……」

四人は談話しながら食堂に着いた。千春はやはり、料理長のルノアーに挨拶をする。

「ルノアーさん、来ったよーん」

「おー、お昼か。そろそろ俺たちの準備は終わるが、何を食べる？」

「んー、ちよつとまた作ろうかなって思ってます」

「……朝みたいなのはやめてくれ。あの後、大変だったんだ」

「あー、すみません。でも、似たような感じになったら、すみません」

「……まあ、それはしょうがない。新しい料理が作れると、前向きに考えよう」

「あはは。それじゃあ、豚……オークのお肉の、ロースの部分で伝わります？」

「ロース？」

「んつと、背中あたりの肉で、赤身と脂肪しぼうがくつきり分かれてる感じの場所」

「ああ！ あるぞ」

ルノアーはテーブルにある肉を取りに行き、戻ってきた。

「今日はオークのステーキもメニユーに入れてたからな、これだ」

「おー！ いいお肉です、高級豚肉みたい」

「これをどれくらい使うんだ？」

「サイズは朝パンに挟はさんだハンバーグくらい。厚みは二センチくらい欲しいかな。それを四枚お願
いします」

「わかった。おい！ これを二センチくらいのサイズで切ってくれ！」

ルノアーは肉を持つてくるつきについてきた料理人二人に肉を切らせる。

「あとは千切りキャベツを一人こんくらい……」

千春はそう言つて、手で器を作つてみせた。

「よし、それはあつちのやつらにさせよう」

「キャベツはすつごく細く切つてくださいね。切つた後は水に一度浸ひけると、シャキシャキになり
ますから」

ルノアーは頷うなずくと、担当に指示を飛ばす。

「それで肉の方は焼くだけか？」

「えつとねー、ちよつと手を加えるから見てくださいね」

千春は切つたオーク肉を受け取り、まな板に置く。

「こうやつて、斜めに三分の一くらいの深さで刃を入れます。間隔は五センチくらいで、だいたい
でいいですよ。全体に刃を入れたら、ひっくり返して同じように斜めに刃を入れます。そしたら、
裏表で格子状に刃が入る感じになるので」

千春はオークロース肉を持ち上げてみせた。

「そうすると、どうなるんだ？」

「肉が歯で噛かみ切れるくらい柔やわらかくなるのと、筋切りもできるから肉が反らない」

「ほおおお」

「それから、この肉に塩と胡椒こしをかけて、あとはコロッケと一緒に。小麦粉つけて、溶き卵つけてパ
ン粉つけて揚げます。ただ、揚げるときはカラアゲと一緒に二度揚げしてね。それで終わり」

「ふんふん。よし、わかった。お前ら、聞いた通りだ。肉切つてるやつは、切れたら刃を入れてい
け。そうしたら、揚げもののやつのところを持つて行って、どんどん揚げる！」

ルノアーは指示をどんどん飛ばしていく。そんな彼に千春が声をかける。

「ルノアーさん、四枚でいいんですけどー」

「どうせそこで食べるんだろう？ 今からどんな人が入ってくるが、絶対チハルさんが何食べてるか見るだろう。そして同じものを頼む。朝の二の舞いが目に浮かぶ」

「ごめんて」

千春は苦笑いで答える。

「トンカツって言うんだけど、これにナンチャッテウスターをかけて食べても美味しいですよ。ビールによく合うらしいし」

「ビールってなんだ？」

「炭酸の麦で作ったお酒」

「エールか！ それじゃあ、トンカツは夜のメニューに決定だな」

「ここ、お酒飲めるんですか？」

「基本夜の飯だけだ。夜勤のやつらが寝る前に飲むときがあるから、昼に出すこともあるがな」

二人が話をしている間に、肉はパン粉もかけられ、どんどん揚げられている。

「それじゃ、キャベツの千切りを水切りして、こっちにください。あと、パンをお願いします」

「パンはこれな。それと、ナンチャッテウスターってやつはこれだよな」

「そう、あれ？ 作り方教えたっけ？」

千春は、ルノアーがすでにナンチャッテウスターを作って出してきたことに驚いた。

「サファイーナとモリアンが味見してる横で見てたじゃないか」

「そっか、手間が省けて助かる！」

トンカツが揚がって、千春のところに運ばれてきた。

「うっは、美味しいそ。そう言えば、オーク食べるの初めてだな」

「そうだったか？ ああ、ハンバーグのときは王族の食卓で食べてたな。猪肉よりも美味いぞ？」

「へへそれは楽しみ。それじゃ、パンにトンカツを載せて、さらにキャベツを載せます。その上からナンチャッテウスターをたらーっとかけて、その上にマヨ！」

千春はマヨネーズをボトツとキャベツの上に載せ、パンを置く。

「オークカツサンドバーガーできあがりー！」

「これは美味しそうな見た目と香りですね」

「うん！ マヨが載ってて美味しいと思えない！」

「おいしそー！」

見ていたサファイーナ、モリアン、ユラも、食べてないのに盛り上がっていた。

「これを、あと三個作りまーす」

千春はさくさくっと作って皿に載せる。

「ルノアーさん、そのテーブルで食べてるから、フライドポテトとケチャップをお願いします」

「わかった、できたら持っていくよ」

「私が取りに来ますから大丈夫です！」

モリアンが請け合うと、四人はテーブルに着いた。飲み物は給仕が用意してくれたフルーツジュースだ。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

千春が続いて三人も言ってから、一斉にかじりつく。

「うつま！ オークうま！」

「美味しいですね。オークはよく口にしますが、すごく柔らかいです」

「……（コクコクコクコク）」

千春、サフィーナが声を上げ、ユラがそれに同意する。

「美味しいいいいいいいいい！！！！」

「モリアンうるさいー」

すかさず千春とサフィーナがツッコミを入れた。

やがて、昼食を食べに来た兵士たちが、たまたま千春たちに興味を持った。

「料理長、俺もあれくれ！」

「俺もだ！」

「俺もフライドポテトつきでな！」

俺も俺もと次々注文が入るが、ルノアーや料理人たちはすでに準備万端だった。朝の轍を踏まないように、パンを切る係、重ねていく係などに分かれ、効率よく作っている。

「チハル様、失礼します」

千春の横から野太い声が出た。何かと思い、千春はすぐに声の方を見た、いや見上げた。そこには、二メートルはあろうかという獣人が立っていた。

「おっと失礼しました」

獣人は片膝を突き、千春と視線を合わせた。それでも座っている千春は少し見上げる形になったが。

「第一騎士団団長のエーデル・キアヌと申します。以後お見知りおきを」

獣人は首を垂れながら、自己紹介をする。

「チハル様、こちらが先ほど王子殿下の言われておりました、虎の獣人であるエーデル様です」

サフィーナが説明してくれた。

「あー、獣人で貴族の！」

「殿下より紹介されておりましたか！ ありがたきことでございます」

エーデルは首を垂れたままお礼を言う。千春はそんな彼に尋ねる。

「それで、どうかされました？」

「いえ、この食堂の食事の改善、新しい料理を伝えていただいたことをありがたく思い、お礼も兼ねて声をかけさせていただきました」

「いえいえ！ 自分が美味しいものを食べたいただけなので！ あと、もうちょっと碎けた感じで話してもらえたら、すっっっっごい助かります！」

国王陛下やマルグリット、エンハルトら王族でさえ、千春には結構碎けた話し方をしてくれる。

ここまで堅いのは、まだあまり話をしたことがない宰相くらいだ。

「そ……そうですか？ チハル王女殿下に砕けた……」

「エーデルさん、チハルさんはそういうのあんまり気にしない人なんで、普通に話していいと思いますよ？」

「モリアン、あなたはもうちよつと畏まりなさい」

「サフィー、モリアンはこれくらいがいいよ。私も落ち着くし」

「まあそうですね、チハルがそういうなら」

サフィーナも、当の本人から言われれば矛を収めるしかない。

「そ、そうですか、いや、さすがに……」

「んー陛下とかの前ではそういう話し方で、普段は同僚くらいでお願いします」

「はい、それでしたら」

「あと、呼び方はチハルでいいですよ」

「いえ！ それはさすがに！ チハル様で！」

千春もさすがにこり押しするほどではないため、呼び方については苦笑いで了承した。

「では改めて。食事をありがとう。俺も食事が楽しみでしようがないんだ」

「それは、ルノアーさんたちの努力と愛情の結晶ですからねー。このカツサンドバーガーだって、作り方教えただけで、作ったのは料理人さんたちだもん。それより、早く頼まないとなくなりますよ？」

千春に言われてエーデルが振り向くと、オークカツサンドバーガーが次々と消費されていく様子が見えた。

「それはいかん！ それではまた。何かありましたら、兵士へ一声かけていただければ、すぐ駆けつけますゆえ。失礼いたします！」

そして、彼は急いで注文に向かった。

「また堅くなつてたね」

「仕方ありませんよ。あの方は軍人の中でも真面目の中の真面目と言われてますから」

サフィーナが答えた。

「すごいね、あの体格もそうだけど、威圧感が半端ナイねー、こっちの獣人と大違いだ」

千春はそう言つて、ちよつどオークカツサンドバーガーの最後の一口を食べ、モグモグしているユラを見る。

「うん！ 可愛い！ 可愛いは正義だ！」

「それは私も同感です」

「同じく、獣人と一括りにしてはダメだと私も思いました！」

千春、サフィーナ、モリアンに見つめられたユラは不思議そうにコテンと頭を横に傾ける。

「可愛い！」

第4話 使い道がない!

「さて、人も増えてきたし戻ろうか〜」

「そうですね、座るところも減ってきましたから」

食べ終えた千春、サフィーナは席を立つことにした。さすがは王宮中央の食堂のお昼時、どんどん人が入ってきている。

しかも最近の料理が格段に美味しくなり、さらに日々新しいメニューが増えているため、今まで他の食堂を使っていた人まで、王宮の食堂を使うようになった。原因は概ね千春のせいなのだが、当の本人はあまり自覚していなかった。

「おー? 戻るのか?」

ルノアーが四人に声をかける。

「うん、食べ終わったのに座ってたら悪いですしね」

「それは気にしなくていいぞ。チハルさんたちはいつもそこに座るだろう?」

確かに、さっきまで座っていた場所を見るが、誰も座っていない。

「あそこはチハルさんたちの特等席らしいぞ、誰も座らないんだよ」

「誰が決めたんですか」

「知らん。誰も座らないから兵士に聞いたらそう言った。チハルさんがいつ来ても座れるようにだつてよ」

「そのときは空いているところに座るから別にいいのに」

ルノアーと千春が話していると、周りから次々と声がかかる。

「美味いもん作ってくれるからいいんだよ!」

「いつも座る席の方が安心するだろ」

「チハル様が何食べてるか、そこ見ればわかるからな!」

「俺たちの席はいくらでもあるからな!」

「あははは、ありがと、遠慮なく使わせてもらおうね!」

千春はお礼を言い、食堂を出ていく。

「どうりでいつもあの席が空いてたわけですね、厨房から近い特等席ですのに」

「いつもあそこ空いてましたから座ってましたもんねー」

サフィーナもモリアンまでも呆れていた。

「それで、チハルはまた戻ってお勉強ですか?」

「んー……飽きた」

「なにモリアンみたいなこと言ってるんですか? 明日から試験ですよね?」

「そうだけど、平均取ればいいし、集中力切れたもん」

「では、どうされますか?」

「遊びに行きたいけど、昨日の今日で街はなーって思うし、どうしよかな、こっちって何か娯楽ってあるの？」

「娯楽ですか、演劇を見たり本を読んだりするくらいしか私はわかりませんね」

「モリーはいつも何して遊んでるの？」

「私ですかー？ んー？」

モリアンは顎に人差し指をつけ「んー」と考える。

「街にお出かけして食べ歩きとか、お茶したり、お友達のところでお茶会ですかねえ」

「食べてばっかりだなモリーは、ユラちゃんは何してあそんでた？」

「えっとー、きのみあつめたり、かりしてたー」

「それは…遊びなのかな、トランプとかカードゲーム的なものはないの？」

「聞いたことはないですね」

「そっかー」

四人は門の部屋の前まで行くと、そこに侍女が一人立っていた。

「お帰りなさいませ、チハル様」

「あれ？ お母様の付き人の？」

「はい、アルベルと申します」

そう言うと、アルベルはペコリと頭を下げる。

「どうしました？」

「王妃殿下からの言伝を」

「はい、なんでしよう？」

「お時間があれば来ていただきたいと」

「いいですよ」

「ありがとうございます、今からよろしいですか？」

「ええ、やることなくて何しようかと話してたところなので」

「それでは案内させていただきます」

アルベルはまた頭を下げる。

「サフィーたちはどうする？ 部屋で待つてる？」

「そうですね。私はチハルについていきますので、モリアンはユラとお留守番してください」

「はーん」

揃って返事をする二人を見て、千春とサフィーナはクスッと笑った。

「アルベルさん、お母様の部屋ですか？」

「いえ、別の応接室になります」

「なんだろう？ まあ、行けばわかるか」

千春とサフィーナはアルベルの後ろをついていく。

「こちらでございませす」

アルベルは普段通らない豪華な廊下を歩き、とある扉の前で立ち止まった。そして、扉の前にい

る執事に声をかけると、その執事が千春たちを見て頭を下げた後、部屋の中に向けて告げる。

「チハル様が来られました」

「入ってもらって」

中からマルグリットの声がする。

「参りましたお母様、何か御用ですか？」

部屋に入ると、大きなテーブルがあり、マルグリットの前に二人の男性が座っていた。

一人は恰幅かちぶちがよく、もう一人も小柄こがらではあるが身なりのいい服を着ている。

「ごめんなさいね。お勉強の途中だったのでしょう？」

「いえ、ちょうど気分転換をしようかと、遊びの相談をしていたところだったので」

「あら、それはそれで申し訳ないわね。ちよつとチハルに相談があったのよ」

マルグリットはそう言うと、自分の横に座るように手招きする。

「失礼します」

千春はベコリと頭を下げ、マルグリットの横にチョコンと座る。

「紹介するわね、私の娘、チハル・アル・ジブラロール第一王女よ」

初めて王国でのフルネームを言われた千春は、一瞬マルグリットを見たが、ニッコリと微笑ほほえみ返された。すると、恰幅かちぶちのいい男性が自己紹介を始める。

「商業ギルドのギルド長をやっておりますメイソンと申します。以後お見知りおきを」
メイソンは頭を下げた。

「私は、マルグリット王妃が経営しておられます商会の商会長をしておりますローガンと申します」
ローガンはチハルを見てニッコリと微笑ほほえんでから、頭を下げる。

「よ……ろしくおねがいますか？」

「あら？ 緊張しているのかしら？」

マルグリットがフツツと微笑ほほえむ。

「それでお母様、相談とは？」

「どれから話をすればいいかしらねえ」

マルグリットは、テーブルの上にある紙を一枚取った。

「まず、チハルが王宮で作った料理をいくつか商業ギルドに登録して、市井しせいに出したいと思っっているのよ。その筆頭が『パン』ね」

「登録？」

「ええ、作り方を商業ギルドが市井しせいへ売るのでよ」

「タダで教えてもいいですよ？」

男二人もそうだが、マルグリットもチハルの言葉に驚く。

「あれですよ、特許とかそういうことですよね？ 必要ないです。今の王国のパンは食べにくいですから、作り方は無料で出して構いません。そうすることで小麦の需要も消費量も増えます。お父様にお教えしている件が上手くいけば、供給も問題ないでしょうから」

千春は淡々と語った。

「そ、そうは言いましても、あのパンを試食させていただきましたが、今までのパンとは全く別物、商品価値としても相当あります。無料で製造方法を教えてしまうと、どこでも作られ、商品としての価値が下がってしまいますが！」

商業ギルドの長は汗をかきながら力説する。

「はい、私としては今あるパンと同価格、もしくは付加価値をつけた商品で価格を上げるくらいで市井しせいに出回ることを期待します。色んな人が色々な商品を作る。それを食べ歩きする。最高じゃないですか。何か問題がありますか？」

「い、いえ」

「チハル、レシピの販売であなたにマージンが入るわよ？」

マルグリットが千春に言った。

「はい、多分数パーセントのライセンス収入の利益だけで、相当な額が入るでしょうね」

「わかっていないの見逃すのかしら？」

「はい、使わないですから」

二人の会話を聞いて、メイソンとローガンはポカンと口を開けたまま固まっていた。

「あはははは！」

大笑いするマルグリットに、千春はギョツとする。

「久しぶりに大笑いしちゃったわあ。メイソン、そういうことらしいわ。全て理解している上での言葉です。しっかりと進めてちょうだい」

「は、はい！ 王妃殿下、王女殿下ありがとうございます。しかし、銭貨ぜんだい一枚すら渡さないというのも、ギルドとしては問題があります。」「

メイソンは、ギルド長として一言だけでも言わなければと口を挟はさんだ。

「チハル、王国全体どころかギルドの管轄かんがく、他国にまで影響あるのよ？ それこそ領地を買い取るくらいの金額が入ってくるのよ？」

「領地とかいらなですもん……あ！ それじゃ、一定の金額まで貰もらったらあとはフリーってどうです？」

「あら？ 何か欲しいものを思い出したの？」

「はい。孤児院を作って維持できる程度のお金が最初からあれば楽かなと」

「何言ってるの？ それは国の仕事でしょうに。今回の件でしょう？ もう動いてるから、チハルは気にしないでいいのよ」

「なら、あそこの孤児院みたいに、新しいのに出資という形でどうです？」

これならどうか、と千春は答えてみた。

「そうねえ。領地が買えるくらいのお金を出資したらどうなるのかしらねえ、メイソン」

「了解しました、孤児院を数軒新しく建て、管理者、初期投資分を見積もります。その後の管理費に関しても問題はありません、足りなくなるとはまずないでしょうから」

「そうね、レシピの販売と商品販売利益は最低限の設定で行きましょうか。それでも金額が大きいわねえ。まあ、あつて損はないでしょう。メイソン、チハルの口座を商業ギルドに作って、余った

金額はそこに入れておきなさい。書類は用意しておくわ
千春を置いてきぼりで、どんどん話は進んでいく。

「次はどれかしら？」

マルグリットはテーブルの紙をまた一枚取った。

「これは陳情の分ね、チハルの作った料理を市井で作ってもいいか、ね。数人の料理人から王国の厨房以外でも作っていいかって聞かれているのよ」

「いいですよ。別に秘匿するようなものじゃないですから」

「……パンであれでもものね。これもお金になるのよ？」

「はい、いいですね」

「王宮の料理人にはそう伝えておくわ。多分市井でやっている身内の料理人に教える程度でしょうけど、儲かるでしょうねえ」

マルグリットは呆れたように呟く。

「あーとは、これは私の分ね。シャンプーとコンディショナーができたわ。これを私の商会で販売するわね。それで、その売上の何パーセントをチハルに渡すかなんだけど……」

千春はニコニコしながら一言。

「いらぬですよ？ お母様」

「はあ……欲のない子ねえ」

「だって、金貨の使い道ないんですもん」

心の中では『なぜ日本で換金できないんだあ！』と叫んでいた。

「ローガン、本来チハルに渡すつもりだった分、売上の二十五パーセントはそのまま別会計で回して。私がチハルに使います」

「はい、了解いたしました」

「え？ 私に使うってなんですか？」

「そのままよ。本当なら国で出せるお金の。私も使えるんだけど、国民の税金じゃない？ 最低限しか使いたくないから、私は商会のお金を主に使ってるのよ。チハルもそういうふうにするだけ」

「あー、把握しました」

そしてメイソン、ローガン、マルグリットは三人でもう少し商談を続けるからと千春にお礼を言い、千春自身は退室した。

「はー疲れた、早く戻ってユラ成分補給してゆっくりしよう」

「なんですか？ ユラ成分って」

サフィーナが千春に尋ねる。

「そのまま。ユラちゃんから発するマツタリ成分を補給するの」

「わからないと思いますが、なんとなくわかってしまいました」

「でしょ。いいよね、心が休まるというかなんというか」

二人はクスクス笑いながら部屋に向かう。

「……あー」

「どうしました、チハル？」

「お金の使い道を思いついた」

「何か欲しいものが？」

「お風呂欲しい」

「浴槽ゆきそうならいつでも出せますよ？」

「出せるって？」

「アイテムボックスに入れてますから」

「サフィー、めっちゃ使いこなしてるね」

「便利どころじゃないですね、この魔法」

「本当に便利なんですよ、とサフィーナは頷うなずく

「でも、浴槽ゆきそうじゃなくお風呂ふろが作りたい！ 部屋に！」

「わかりました、セバスさんに言っておきます」

「いや、私の稼いだお金でね？」

「いえ、チハルのお金は必要ないですね。言えば作ります」

「えー……お金の使い道を考えてたのに」

「別のことで使えばいいじゃないですか」

「それを考えてお風呂ふろって言ったのー！」

大概たいていのことは王女としての特権で普通に手に入ると、サフィーナは言う。そもそも、サフィーナ

のアイテムボックスには千春には言っていない追加の金貨が宰相から渡されているし、教えている金貨百枚ですら手付かずで入っている。それだけでも浴室がいくらでも作れるのだ。

「使い道ないじゃーん！」

「そのうちあるんじゃない？」

ほっぺを膨ふくらませながら歩く千春に微笑ほほえみながら、サフィーナは答えた。

第5話 娯楽がない！

「ただいまー」

「おかえりなさいませ、ちはるおねえさま」

「あら、ユラ様、お上手ですね」

「どうしたの!? ユラちゃん？」

部屋に戻るとユラが丁寧ていねいに迎えてくれた。サフィーナは褒ほめたが、千春は突然のことにびっくりしていた。

「モリアンさんにおしえてもらいました」

ユラはニコニコしている。

「うん、えらいねえ、でも今はいつものユラちゃんがいい！」

千春はそう言うと、ユラを抱きしめた。

「サフィーナさん、何があつたんです？」

「モリアンにはわからないような難しい話をたくさんしてきたので、心の洗濯ですよ」

「なんで私だとわからないんですかあ！」

「特許技術の販売でライセンス収入が何パーセントあつたらいくらとか、そういう話」

「ごめんなさい」

サフィーナは軽いため息をつき、お茶の準備を始める。一方、抱きしめられたユラは困惑していた。

「チハルおねえちゃん？」

「なーにーかーなー（くんくん）」

「チハルさん、すごい怪しい人みたいになってますよ？」

「モリーうるさーい。ユラ成分を補充中なのだー」

千春はユラに抱きついたまま、モリアンに文句を言う

「ふはぁ！ 生き返った！」

「チハルさん、死んでたんですか？」

「幼女からしか得られない養分があるのだよ、モリー」

「意味わかんないです」

「ユラちゃん、モリーに抱きついてみて」

千春に言われ、ユラはテコテコと歩いてモリアンに抱きつく。

「！！！！」

「……ね？」

「生き返りませぬ」

「二人とも何やってるんですか。お茶がはいりましたよ」

サフィーナは呆れ顔で二人を見つつ、お茶を勧めながら、口を開いた。

「それで、これからどうします？」

「そうだね、急な用事は終わったけど、暇なのは変わらないんだよね」

「チハルさん、さっき言ってたトランプってのは？」

今度はモリアンが口を開いた。

「あ、ちょっと待ってて」

千春は扉を通り、自室の机の引き出しからトランプを取り出す。ついでに、ちょうど目に入ったリバーシも持っていく。

「ただいまー」

「二におかえりなさい」

「はい、これがトランプっていうカードゲームね」

「こっちの大きいのはなんですか？」

モリアンはリバーシの方が気になるようだ。

「これはボードゲーム。文字とか関係ないし、ルールもすぐ覚えられるから持ってきた」

「へー、どうやって遊ぶんです？」

千春は箱に入れたままにしていたリバーシを取り出し、白黒の駒を盤面に並べる。

「黒の人が先攻で、交代で駒を置いて、違う色を挟んだらそれをひっくり返すって」
駒を適当に置いて白を黒にひっくり返した。

「へえ、簡単ですね」

サフィーナが深く頷いた。

「そ、それで、駒を全部置いたときに、自分の色が多い方が勝ちっていう単純なゲームだよ」

「へー、チハルさん、私とやってみましょう！」

「ほう？ モリーが私に勝てるでも思っているのかね？」

「こんな簡単なゲームなら、勝ち負けなんて運でしょう！」

「ほー！ かかってきなさい！ 先手の黒はモリーに譲ってあげよう！」

そして二人はリバーシを始めた。ユラも椅子に座り、ジーっと見ている。サフィーナはあまり関心がなさそうにしているが、二人の駒をじっと見ていた。そして――

「……真っ白」

「まあ、初心者相手に大人げなかったわ。モリー。次は初心者同士でやってみたら？」

「わかりました！」

モリアンはチラッとサフィーナを見る。なぜかサフィーナにフツと笑われた気がした。

「じゃあ、ユラちゃん勝負！」

「うっわ大人げない」

「わかりました。しょうぶですー！」

「それじゃ、ユラちゃんが黒ねー」

千春に大人げないと言われても、サフィーナに負けそうな気がしたモリアンは、ユラに勝負を申し込むが――

「……なんですか？ 置くところないんですけど」

「あ、そういうときはパスって言って、そのままユラちゃんのターンね」

「はい！ ここ！」

パチ、パチ、パチ。

「ここです！ いっぱいひっくり返りますよ！」

パチ、パチ、パチ、パチ、パチ。

拮抗するかと思われた勝負の行方は――

「真っ黒ですー！！！！」

「モリー弱っ」

敗北したモリアンは呆然としていた。

「ちはるおねーちゃん、かちました！（フンス！）」

「サフィーも私とやる？」

「そうですね。やり方は覚えましたので、お相手させていただきますね」